

「遼陽」という街 (その2) 寺西俊英

私が初めて遼陽に行ったのは、大連に赴任した翌年の2008年夏でした。中国人の友人が「歴史の好きな貴方を案内したい街がある。さほど有名ではないけどね。」と言うので誘われるままに行ってみました。それが遼陽だったのです。遼陽という街はもちろん知らなかったし、歴史上何が有名なのか知りませんでした。ただ、日露戦争で確か「遼陽の会戦」があったな、という程度でした。当時は、高鉄は走っていませんでしたので在来線の遼陽駅で下り、そこからぶらぶら歩いて行くと遠くに目立つ塔が見えてきました。近くに行くと見ると、大きなお寺のある広い公園の一角に一風変わった形の塔がありました。どっしりと重厚な感じですが、優美で美しいこの塔に一目で惚れてしまいました。青空にスクッと天を突くように立っている姿は神々しささえ感じさせます。これが遼陽のシンボルである「白塔」でした。今回は、「白塔」にスポットライトを当てて書いていきます。

ここで白塔の歴史を振り返って見ましょう。前号でも簡単に紹介しましたが、女真族が建てた「金」という国のお話です。当時東北地方は遼（契丹族の王朝、916年～1125年）が支配していて女真族はその支配下にありました。しかし遼の圧政に耐え兼ね完顔阿骨打が反乱を起こし、ついに遼を追いやり東北地方を勢力下に置きました。そして1115年に建国し国号を金としたのです。「金」という名前は本拠地としていた地方に砂金が採れたため、と言われていました。首都は初め会寧（黒竜江省）に置き後に燕京（今の北京）に移しました。副都は遼陽としました。金は初代の太宗から10代続きましたが、1234年にモンゴル（元）に滅ぼされます。白塔は第5代皇帝の世宗（完顔烏祿）が建立しました。彼の母は貞懿皇后といい、遼陽の人で一族の完顔宗堯の側室でした。1135年に宗堯が亡くなると再婚を拒否し出家。燕京から遼陽に戻って清安禅寺を建ててもらいそこで夫の菩提を弔っ



遼陽の「白塔」（遼陽市人民政府ホームページより）

たのです。その美しく賢明で貞節を守った母は、1161年に世宗が即位した年に亡くなりました。世宗はその死を悼み、白塔を建てて厚く供養したのです。因みに貞懿の〈懿〉は、yi と発音し、美しいとか良いという意味です。いい名前ですね。

白塔は写真を見ていただくとお分かりでしょうが、高さ70.4メートル、八角形の13層から成っています。1161年（母の亡くなった年）～89年の創建です。28年もの歳月をかけて造っていますが、母への思い出の深さが分かる気がしますね。レンガ造りで何度も改修されていますが、830年経った今でも創建当時の面影を留めているそうです。塔身の八面に座仏、脇侍、飛天などの彫刻が彫られており、全体の造型と一部の彫刻は芸術的な水準が高いそうです。飛天とは仏教で諸仏の周りを飛行遊泳し礼賛する天人で、白塔の壁面には艶やかに飛んでいる姿が生き生きと彫られています。多くは羽衣をまとっているため天女とも呼ばれています。後年南面には、50センチ四方の大きさに「流・光・碧・漢」の四つの金文字が掲げられました。意味するところは、「流光＝仏光が溢れ出て普く世の中を照らす。碧漢＝緑色の天空のことで、仏教の極楽世界を描いている」ということです。塔頂は、銅製の五個の宝珠と火炎、相輪などでできています。白塔は、広佑寺塔の俗称だそうで当初は漆喰のようなもので白く塗られていたと

ころからこの名が付きました。今は年月が経ち、見る角度や時間帯によって灰色に見えたり茶色っぽく見えたりと、白いとはお世辞にも言えませんが、なぜか私には「白塔」という呼び名がぴったりする気がするのです。ネットを見ると中国には白塔と名の付くのは七座ある（チベット仏教系の白塔ではない）と書いてあります。北京の北海公園の白塔は見たことが有りますが実際に白い色をしていますね。中国全土には歴史ある古塔は76座あり、高さではその中で2番目に高いそうです。遼陽の白塔の形は、契丹族が創造し、明代まで河北から内蒙古、遼東にかけて伝播したようで、遼寧省の錦州市にある「大広濟寺塔」や内モンゴルの「大明塔」等も似た形をしています。因みに西安の有名な大雁塔は、高さは64メートルですが、一口に古塔といってもいろいろな形があります。

話は変わりますが、手元に与謝野晶子と夫の寛が書いた「満蒙遊記」のコピーがあります。二人は1928年（昭和3年）5月5日から6月17日にかけて旧満州・内蒙古を旅しました。今からちょうど90年前のこの旅行は満鉄の招待の為、費用の心配は要らず歌だけ詠めばよいとの破格の条件でした。満鉄は毎年文化人や芸術家を招待し、宣伝活動を積極的に行っていたのです。この時期の満州は丁度柳絮が飛び交い、アカシアの白い花が咲き乱れるという美しい自然のなかで旅をつづけたのです。5日に東京を出発、6日に神戸から船に乗り、門司で碇泊後大連に向かつて出港し9日に到着しました。旅順、熊岳城、東北地方の四大名山の一つである千山などゆっくりと見物し、歌を詠みながら初めての中国を楽しんだのです。そして5月21日に遼陽駅に降り立ち、数日友人たちと交流し、案内してもらいました。満蒙遊記の「遼陽」の項を見ると次のように書かれています。

〈満州に現存する都市で最も古いのは奉天省の遼陽である。「漢書地理誌」に載せた「襄平城」が今の遼陽城であることを「遼東文献徴略」の著者が考証してゐる。～中略～それが有名な遼陽の白塔

である。私達は主としてこの塔を観たいために、満鉄本線の遼陽駅に下りた。〉

この書の内容は、殆ど晶子が書いたそうですが、博識に加え事前の下調べを十分に行った節が随所に見られます。引用した文にあるように「有名な遼陽の白塔」とあるので当時の文化人の多くはこの塔のことは常識だったのではないかと思います。そしてその塔を観るのが第一目的で遼陽駅に下りたわけですね。この塔については次のように書いています。

〈白塔は駅に著く一里前から既に平野の上に望まれたが、駅前の広場に出ると、その薄白い優雅な円みある姿が、公園の楊柳の上から私達に会釈の微笑みを送るのであった。～中略～塔は度々の修理を重ねたものであらうが、久しい間の風雨に曝されて可なり破損してゐる。殊に上層は幾百羽となく岩燕の大群が巢を作って、その周囲に飛翔している。初夏の温和な青空の下で夢のやうに飛ぶ柳絮の風に吹かれながら、この廢残の古塔を見上げるのは淡く哀しいやうな一種の快さであった。〉如何にも女性らしい視点で書かれていますね。寛が書いた序文には一か月半の旅行で、二人で一千首近い短歌を詠んだと有り、すべてを見ることはできませんがその中で一首ずつ遼陽での短歌を紹介します。

〈寛〉 遼陽の駅に下ればしろき塔

月の明りを柳にぞ置く

〈晶子〉 温泉の柳絮古城に見し柳絮

遼陽県に散るなる柳絮

私がこの塔に惚れたと書きましたが、何となくお分かり頂いたでしょうか。晶子は柳絮がかなり気に入ったようですね。近い将来にまた雄姿に会いに行こうと思っています。なお二人の旅行ですが、実は旅行中の6月4日、滞在中の奉天（瀋陽）で張作霖爆殺事件が発生し、北京行きを断念したことを付記します。

（続く）

（注：『満蒙遊記』からの抜粋は、原文の通りに転記した）